

福田下遺跡

― 町道福田松瀬線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 ―

二〇一二年三月

公益財団法人和歌山県文化財センター

福田下遺跡

― 町道福田松瀬線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 ―

2012 年 3 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

福田下遺跡

— 町道福田松瀬線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 —

2012 年 3 月 26 日

編集・発行 公益財団法人 和歌山県文化財センター

印刷・製本 株式会社 協 和

例 言

1. 本書は和歌山県海草郡紀美野町福田に所在する福田下遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は町道福田松瀬線道路改良工事に伴うもので、紀美野町より委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。発掘調査は平成 22 年度に実施し、出土遺物等整理業務は平成 23 年度に実施した。（平成 23 年 4 月より公益財団法人和歌山県文化財センター）
3. 調査組織は下記のとおりである。

〔発掘調査業務〕

事務局長	田中 洋次	埋蔵文化財課長	村田 弘
管理課長	富加見 泰彦	埋蔵文化財課技師	津村 かおり

〔出土遺物整理業務〕

事務局長	田中 洋次	埋蔵文化財課長	村田 弘
事務局次長（管理課長事務取扱）	山本 高照	埋蔵文化財課技師	津村 かおり

4. 調査及び報告書作成は、担当者である津村が担当した。
5. 調査及び出土遺物等整理作業で作成した実測図・写真・デジタルデータ・台帳等の記録資料は、公益財団法人和歌山県文化財センターが保管している。

凡 例

1. 実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）を基準とし、数値はm単位で表示している。また、図示した北は座標北を示す。
2. 発掘調査で使用した標高は、東京湾標準潮位（T. P.）を基準とした。
3. 土色は小山正忠・竹原秀雄編著（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）『新版標準土色帖』2000 年度版を基準とした。
4. 遺構番号は調査順に通し番号で付した。
5. 報告書掲載遺物については、通し番号を付け、遺物番号と写真番号は一致する。
6. 出土遺物の色調は小山正忠・竹原秀雄編著（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）『新版標準土色帖』2005 年度版を基準とし、遺物実測図の縮尺は 1/4 としている。

目 次

I 調査に至る経緯	1	IV 調査成果	4
II 遺跡の位置と環境	1	1. 基本層序	4
1. 地理的環境	1	2. 1 区の遺構	5
2. 歴史的環境	2	3. 2 区の遺構	5
3. 既住の調査	3	4. 3 区の遺構	7
III 調査方法	3	5. 出土遺物	11
		V まとめ	14

挿 図 目 次

図 1 福田下遺跡の位置と 周辺の遺跡の分布図	1
図 2 調査位置図及び既住の調査位置図	2
図 3 調査区位置・区割図	3
図 4 1 区遺構平面図・土層柱状図	4
図 5 2 区遺構土層断面図	5
図 6 2 区遺構平面図・土層柱状図	6
図 7 039 落ち込み遺物出土状況図 ・土層断面図	8
図 8 3 区遺構土層断面図	8
図 9 3 区遺構平面図・調査区土層断面図	9・10
図 10 1 区・2 区・3 区出土遺物	12
図 11 3 区 039 落ち込み出土遺物	13

図 版 目 次

PL- 1 1. 調査地全景（上空から） 2. 1 区全景（上空から） 3. 2 区全景（上空から）	
PL- 2 1. 2 区 041 溝・042 溝完掘状況（北から） 2. 2 区 042 土層断面（南から） 3. 2 区 047 土層断面（北西から）	
PL- 3 1. 3 区全景（上空から） 2. 3 区全景（北から） 3. 3 区全景南西側（北から）	
PL- 4 1. 3 区 001 溝・002 溝完掘状況（北から） 2. 3 区 001 溝土層断面（北から） 3. 3 区 002 溝土層断面（北から）	
PL- 5 1. 3- 3 区全景（南から） 2. 3 区 039 落ち込み遺物出土状況（西から） 3. 3 区 039 落ち込み遺物出土状況（西から）	
PL- 6 出土遺物	

表 目 次

表 1 出土遺物観察表	16
-------------	----

I 調査に至る経緯

紀美野町では、町道福田松瀬線道路改良工事が計画され、その予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である福田下遺跡内に位置することから、平成 21 年度に和歌山県教育庁文化遺産課により工事立会・試掘確認調査が行われた。その結果、中世を下限とする遺構と弥生時代と考えられる遺構が確認されたため、本発掘調査が必要と判断された。これを受け、平成 22 年度に和歌山県文化財センターが受託し、本発掘調査を実施することとなった。平成 23 年度において出土遺物等の整理作業を行い、本書の作成を実施した。

II 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

紀美野町は和歌山県の北部に位置する。平成 18 年 1 月 1 日には、旧野上町（以下、野上地区）と旧美里町（以下、美里地区）が合併して誕生した町である。町内中央を紀ノ川の支流である貴志川が蛇行しながら西流し、南には長峰山脈が連なり、県立自然公園の生石高原を有する生石ヶ峰などの森林に周囲を囲まれた山間地域である。

福田下遺跡は海草郡紀美野町福田に所在し、遺跡の範囲は東西 250 m、南北 250 m を測る。

福田下遺跡は、貴志川とその支流である真国川の合流する段丘上に立地し、本調査地は両河川の合

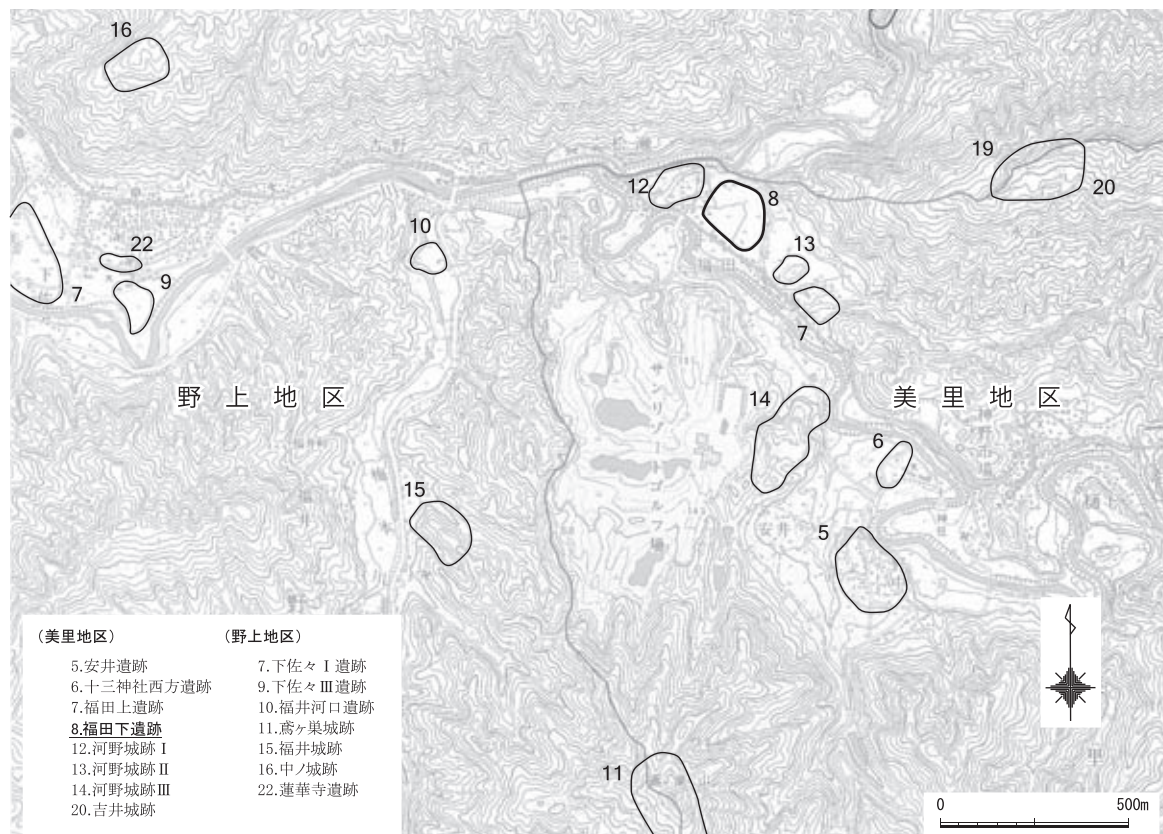


図1 福田下遺跡の位置と周辺遺跡の分布図 (S=1/20,000)

流地点の東側、愛宕山を西側に望む遺跡範囲の東端に位置する。現状は、調査地より南側の県道 310 号線沿いは宅地化が進んでいるが、調査地付近は水田および工場等の用地である。

2. 歴史的環境

紀美野町の南西部に位置する三尾川遺跡からはサヌカイト製の小型ナイフ形石器が出土しており、旧石器時代の遺物が確認されている。また、福田下遺跡が立地する貴志川、真国川流域の蛇行部には小台地が形成され、縄文時代・中世の二時期の遺構の展開が見られる。

縄文時代の主な遺跡としては、美里地区の安井遺跡がある。ここでは縄文土器や磨製石斧、石鏃等の遺物が出土し、竪穴建物が検出されている。また、野上地区の東野遺跡では、縄文土器、土偶、石鏃、石斧が出土し敷石住居跡が確認されており、両遺跡ともに、縄文時代後期・晩期の遺跡と考えられている。その他に、土器・石器等の遺物が採取されているものの、詳細は不明である。

弥生時代から古墳時代の遺跡は非常に少なく、美里地区の笹瀬遺跡と野上地区の下佐々 I 遺跡が挙げられる。笹瀬遺跡は弥生時代後期末の手焙形土器が出土しており、下佐々 I 遺跡では弥生時代後期の土器が確認されている。

平安時代には神野荘・真国荘として、高野山領となる。福田下遺跡が所在する福田は、神野荘に属し、貴志川と真国川の合流点より上流の谷間とその兩岸の山地を荘域とする。貴志川の南岸を通る国道 370 号は高野西街道と呼ばれ、高野山への参詣道のルートとして、古くから利用されている。

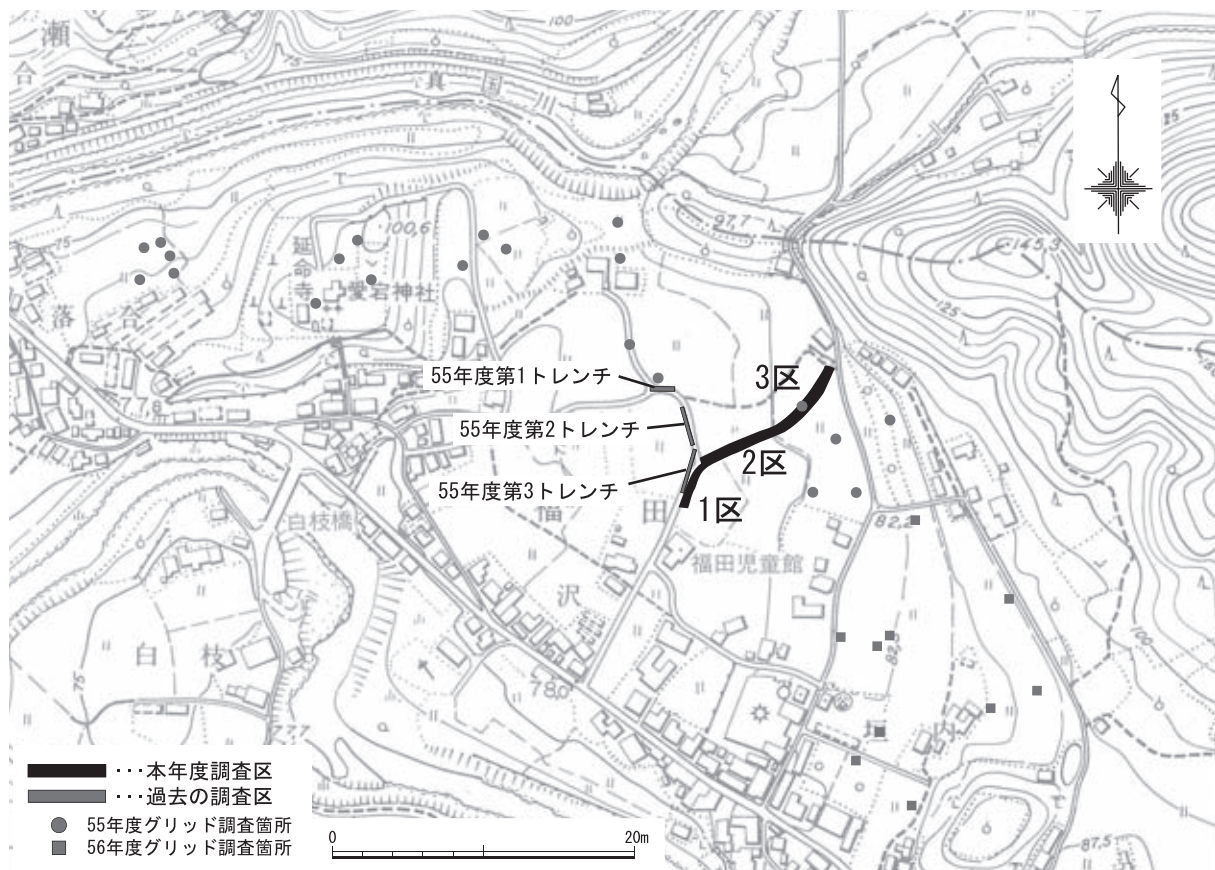


図2 調査位置図及び既往の調査位置図 (S=1/500)

中世に入ると山頂・丘陵部において城館跡が多く見られるようになる。福田下遺跡の周辺には織田信長の高野攻めの際、信長に便宜を図ったとされる河野氏が在住したとされ、河野城跡Ⅰ・河野城跡Ⅱ・河野城跡Ⅲの3箇所では中世から近世初頭にかけての河野氏の居城が確認されている。河野城跡Ⅰは福田下遺跡の西側に位置し、近世の延命寺・愛宕神社建立の際に大きく削平されているものの、山頂には大小の配石遺構や石積みの井戸が確認されている。また、河野城跡Ⅲでは曲輪が確認されている。

その後の紀美野町域の荘園については、天正10年（1585）の羽柴秀吉による紀州平定の際に一時没収されるが、天正19年（1594）から同20年に改めて高野山領とされる。近世でも地域的なまとまりとして荘の呼称が使用された。

3. 既住の調査

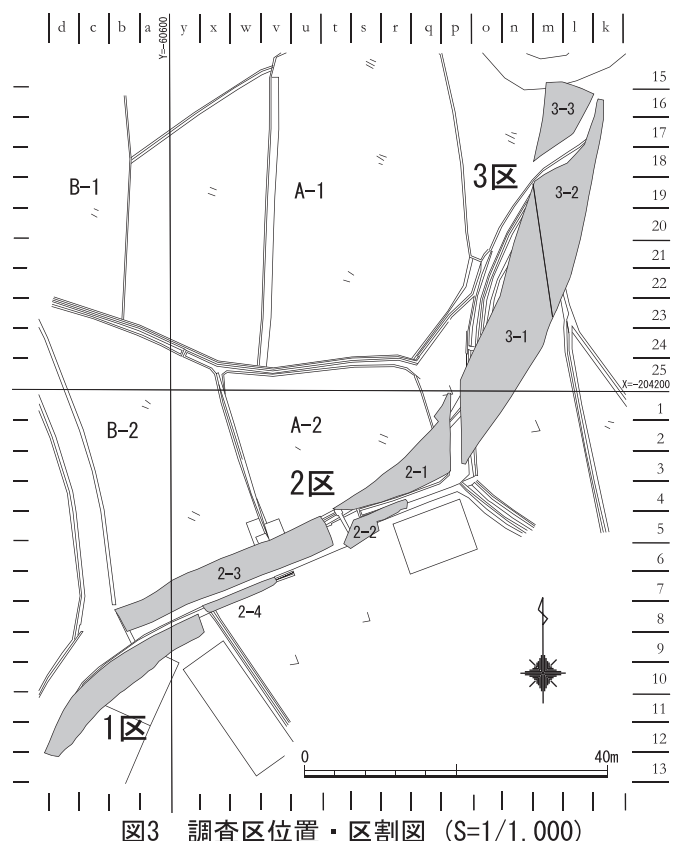
福田地区の生活用道路の整備に伴い、昭和55年度から昭和57年度にかけて福田地区所在の遺跡詳細分布調査として美里町文化財調査会により発掘調査が実施された。

福田下遺跡では、3箇所のトレンチ調査とグリット調査が行われた。トレンチ調査区では、床土下に中世の包含層が存在し、その下は地山となっている。遺構は素掘りの井戸や土坑・ピット群が検出された。また、グリット調査ではトレンチ調査地の東側の地形は床土下は沼地と確認されている。

なお、和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図では、福田下遺跡は縄文時代の遺物散布地とされるが、調査では遺構・遺物は確認されていない。おそらく河野城跡Ⅱの西方に所在する縄文時代の遺物包含層から流された石鏃が採取された結果とされ、福田下遺跡には中世以降の集落が広がると考えられている。

Ⅲ 調査方法

調査区の地区割は、本調査区が網羅できる範囲の北東に任意の基点（X=-204.1km Y=-60.5km）を設定した。この基点から100m四方の区画を1単位とした大区画を設定し、北東端を基点とし西方向へローマ字の大文字でA～Jと、南方向へアラビア数字で1～10と表記した。今回の調査区はA1・A2・B2区となる。さらに4m四方の区画を1単位とした小区画を設定し、北東端を基点とし西方向へローマ字の小文字でa～yと、南方向へアラビア数字で1～25と表記した。遺構図作成や遺物取り上げの際には原則として、4m四方の小区



画で行った。

また、調査区においては、南側から1区・2区・3区と設定し、調査区内にある既設排水溝等により、3区を3-1区～3-3区、2区を2-1区～2-4区に小地区を設定した。

調査における記録として、写真撮影については4×5判モノクロフィルム・6×7判・35mmのカラーリバーサルおよびモノクロフィルムを使用し、適宜デジタルカメラによる撮影を行った。記録図面は、S=1/10・1/20の遺構実測図（土層断面図・遺構断面図・遺構平面図）、S=1/100の遺構配置図を作成した。この他、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影で、調査地全体を撮影したほか各調査区の俯瞰写真撮影を実施した。

IV 調査成果

1. 基本層序

調査前の現況は、北側は耕作地として利用されており、南側は現在、私道や資材置き場となっている。基本層序は、以下のとおりとした。

第0層：現代の造成土で、碎石やバラス等を含む現代盛土である。

第1層：近現代の耕作土であり、褐灰色から灰黄褐色の細砂のa層と、にぶい黄橙色の細砂の床土のb層に細分される。

第2層：中世以降の旧耕作土で、褐灰色の細砂である。

第3層：中世の旧耕作土で、褐灰色の細砂である。

第4層：古代以降の整地土で、褐灰色のシルト及び細砂である。

第5層：基盤層と考えられる。にぶい黄褐色の細砂から粗砂のa層、一部青灰色のシルトから中砂のb層に細分される。

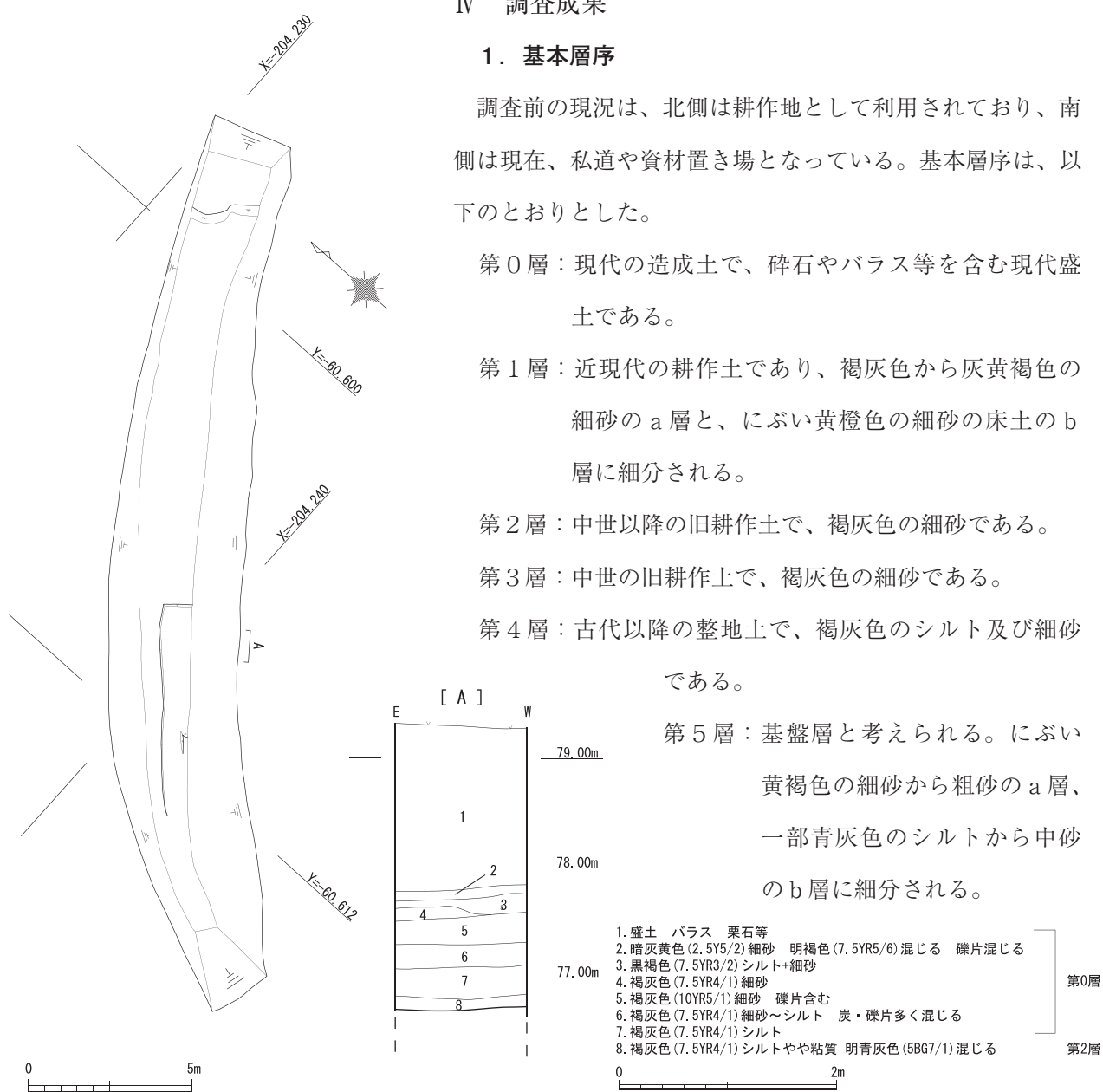


図4 1区遺構平面図 (S=1/200)・土層柱状図 (S=1/60)

基盤層である第5層は、北側で標高約79.3 m、中央付近で標高約78.3 mを測り、南西側では標高約76.6 mを測る。調査区は北側の山々の谷間に位置し、南西側の1区・2区は大きく削平されているものの、北側から南西に向かい緩やかに傾斜した地形と考えられる。

2. 1区の遺構

調査地の南西に位置し、資材置き場の一角である。第0層の現代造成土下に、部分的に薄く中世以降の旧耕作土の第2層があり、地山の第5層が堆積する。第5層はグライ化した褐灰色のシルト質土で、やや青灰色が混じる。遺構は検出されなかった。出土遺物は、瓦器・土師器片等が数点出土した。

3. 2区の遺構

2-1区では第1層の現代耕作土直下に第5層が見られる。調査区南側の2-2区・2-4区は、近年の耕作地の整備の際に、第0層の盛土が行われ、約15cmの第2層があり、地山の第5層が堆積する。2-3区では、第0層の現代の盛土がみられ、その直下で第5層を検出した。2-3区の中央付近で黄褐色シルト質土の第5層を確認したものの、大部分では1区で検出したグライ化した青灰色のシルト質土である。

調査区は私道や擁壁の建設の際に削平されており、明瞭な遺構は少なく、2-1区及び2-3区で遺構深度が深かったと考えられる遺構を検出した。また2-2区・2-4区では遺構は確認されなかった。以下、主な遺構について記す。

040 土坑 2-2区北側で検出した土坑で、不整形な長楕円形で長径約2 m、短径約0.7 m、深さは最も深い所で約0.3 mを測る。遺物は出土していない。

042 溝 2-3区中央で検出した041溝に平行する。溝の肩幅は約0.8 m、深さ約0.3 mである。断面形はU字型を呈している。西から東へと流れるが近接する2-4区では確認されていない。遺物は瓦器の細片が出土している。

046 土坑 2-3区中央付近で検出した土坑である。

ほぼ円形で、直径約0.7 m、深さ約0.3 mである。出土遺物はなく、埋土の色調、土質が042溝と同じであることから、周辺の遺構と同様に鎌倉時代のものと考えられる。

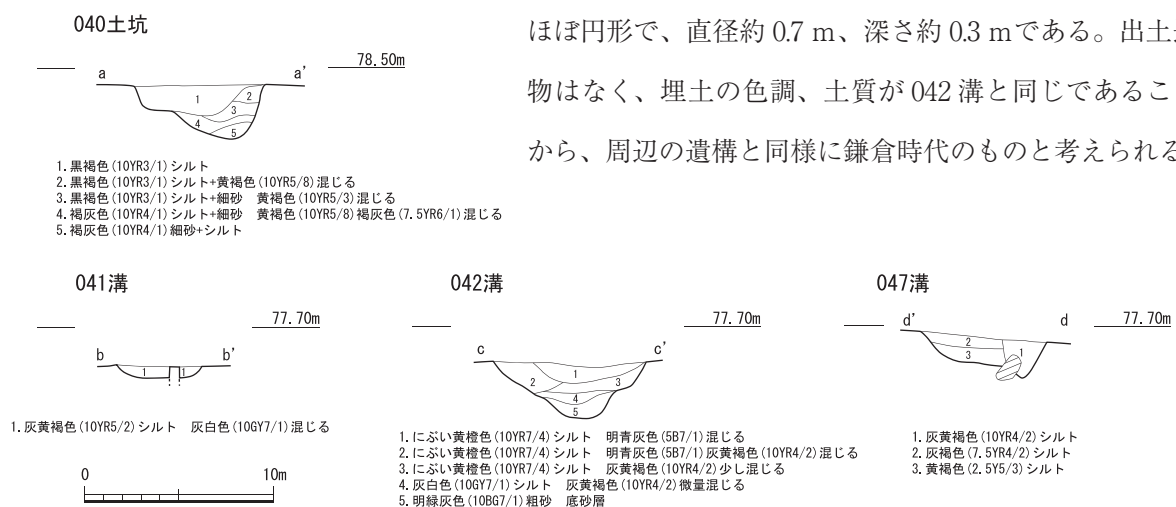


図5 2区遺構土層断面図 (S=1/40)

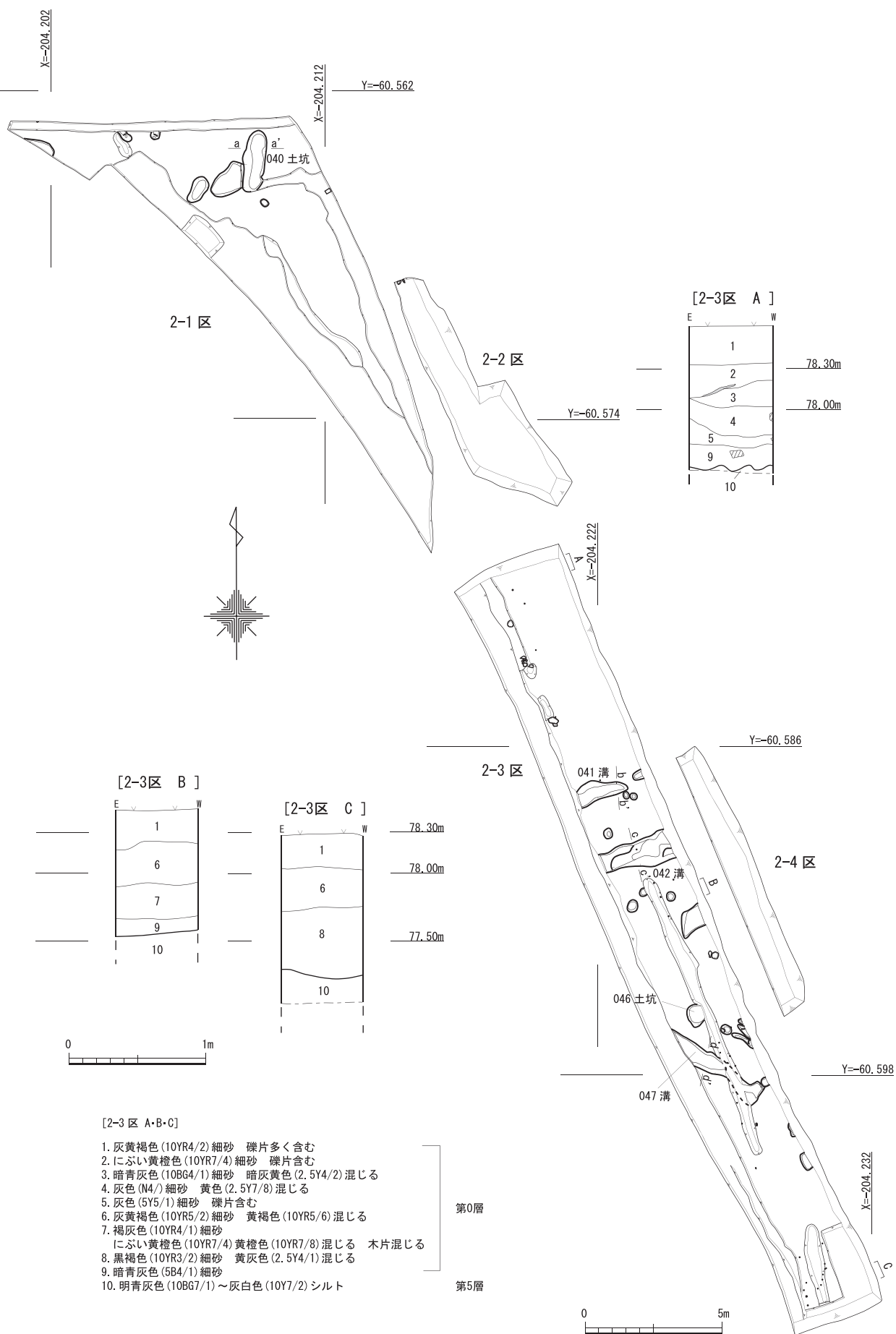


図6 2区遺構平面図 (S=1/200)・土層柱状図 (S=1/40)

4. 3区の遺構

調査区の北側から南側に延びる調査区で、水路や畑地として利用されていた。3区は地山である第5層の残存状況が1区・2区に比べ良好で、現代耕作土の第1層、第3層の旧耕作土である遺物包含層下で、第5層を確認した。検出した遺構は溝、土坑、ピット、落ち込みなどがある。

001 溝 3-1区の南で検出した南北方向の溝で南から北に向かい流れる。溝の肩幅は約0.9 mで、深さ約0.3 m、断面形はU字型を呈している。埋土は3層に分類でき、上層は褐灰色に地山の橙色が混じるシルト質土である。下層は暗い褐灰色で黄褐色が混じり、小礫が含まれるシルト質土である。最下層では褐灰色のシルト質土で、堆積状況から1度、再掘削が行われたと確認された。出土遺物は非常に少なく、瓦器・土師器の細片が出土している。

002 溝 001 溝の北側に平行する。001 溝と同様に南から北に向い流れる。溝の肩幅は約1 m、深さ約0.3 m、断面形はU字型である。堆積状況から1度再掘削行われたと確認でき、埋土は3層に分類できる。上層は明黄褐色に褐灰色が混じるシルト質土で、下層は褐灰色に黄褐色が混じり 001 溝と同様に小礫が含まれる。最下層は褐灰色のシルト質土である。出土遺物も 001 溝と同様に瓦器・土師器が出土しているが細片である。001 溝・002 溝は出土遺物や遺構の形状からはほぼ同時期のものと推測され、鎌倉時代のものと考えられる。

009 土坑 3-1区の北東で検出した楕円形の土坑である。長径約1 m、短径約0.7 m、深さ約0.3 mを測る。出土遺物はみられなかった。底面では拳大の礫が1点検出したものの、この土坑の性格については不明である。

ピット 3-2区で複数のピットを検出した。直径0.2 m～0.3 m、深さ0.1～0.2 mの小穴からなる。何らかの建造物が存在した可能性が考えられるが、柱の配置については明確にできなかった。埋土は褐灰色と、灰白色の2種類あるが、出土遺物から共に中世のものと推測される。

039 落ち込み 3-2区・3-3区の北端で検出した。深さは0.6 mである。3-3区の西側肩を検出したが、東側については調査区外へと広がる。埋土は上層・下層・最下層と区分でき、上層は褐灰色のシルト～細砂で、瓦器・土師器が出土している。下層からは、土師器・須恵器が出土しており、須恵器短頸壺や杯蓋などが見られた。埋土は灰色のシルト質土である。最下層からは完形の須恵器杯や杯蓋や約1mの自然木が出土している。

下層から出土した須恵器短頸壺の出土状況は部分的に約20cm大の礫が集積し方形に並び、古墓の可能性が考えられるが、埋土の状態が水分の多いシルト質土で地盤が不安定なことや、礫集積部分の掘り込み等が確認できなかったことから、古墓とは考えにくいと判断した。

最下層では、湧水が著しく、埋土は灰色の粗砂である。出土遺物から、最下層と下層は奈良時代半(8世紀前半)のものと見られ、上層の鎌倉時代中頃(12世紀後半)までに徐々に埋没したと考えられる。

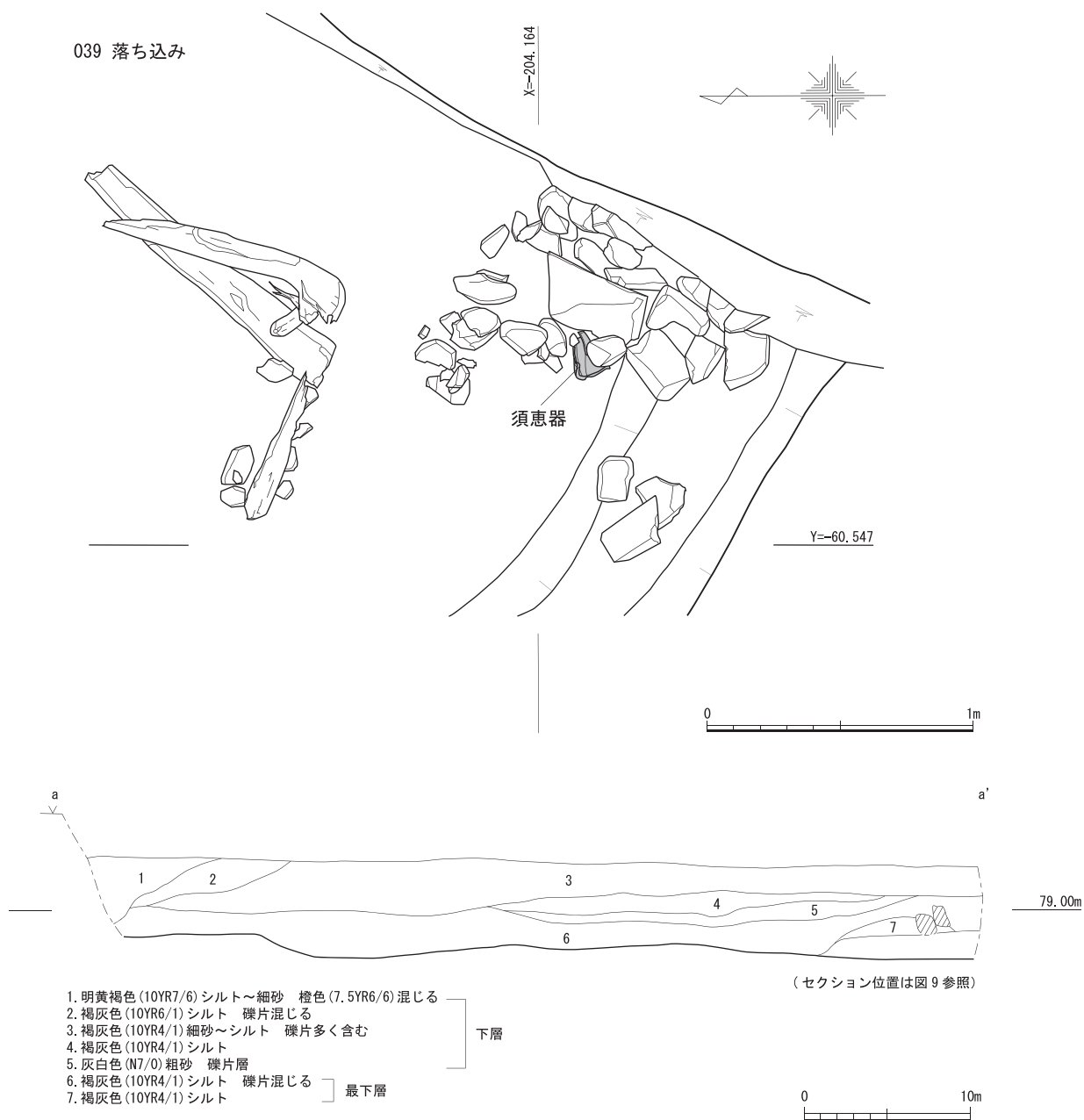


図7 039落ち込み遺物出土状況図 (S=1/25)・土層断面図 (S=1/40)

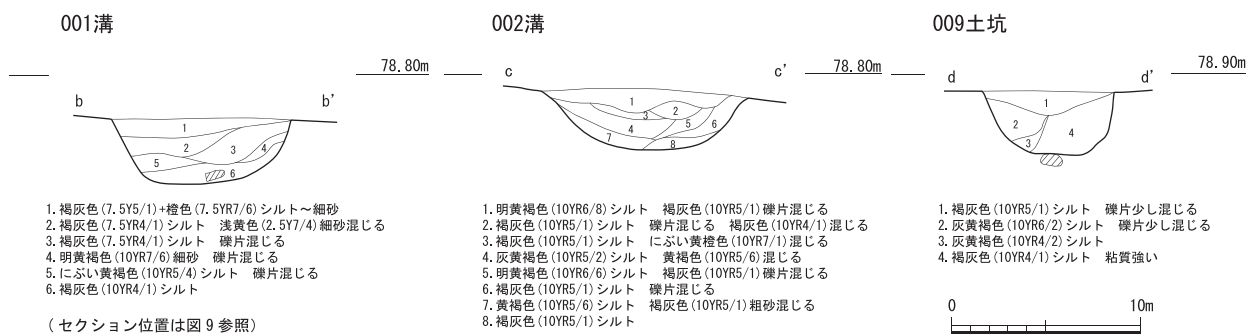


図8 3区遺構土層断面図 (S=1/40)

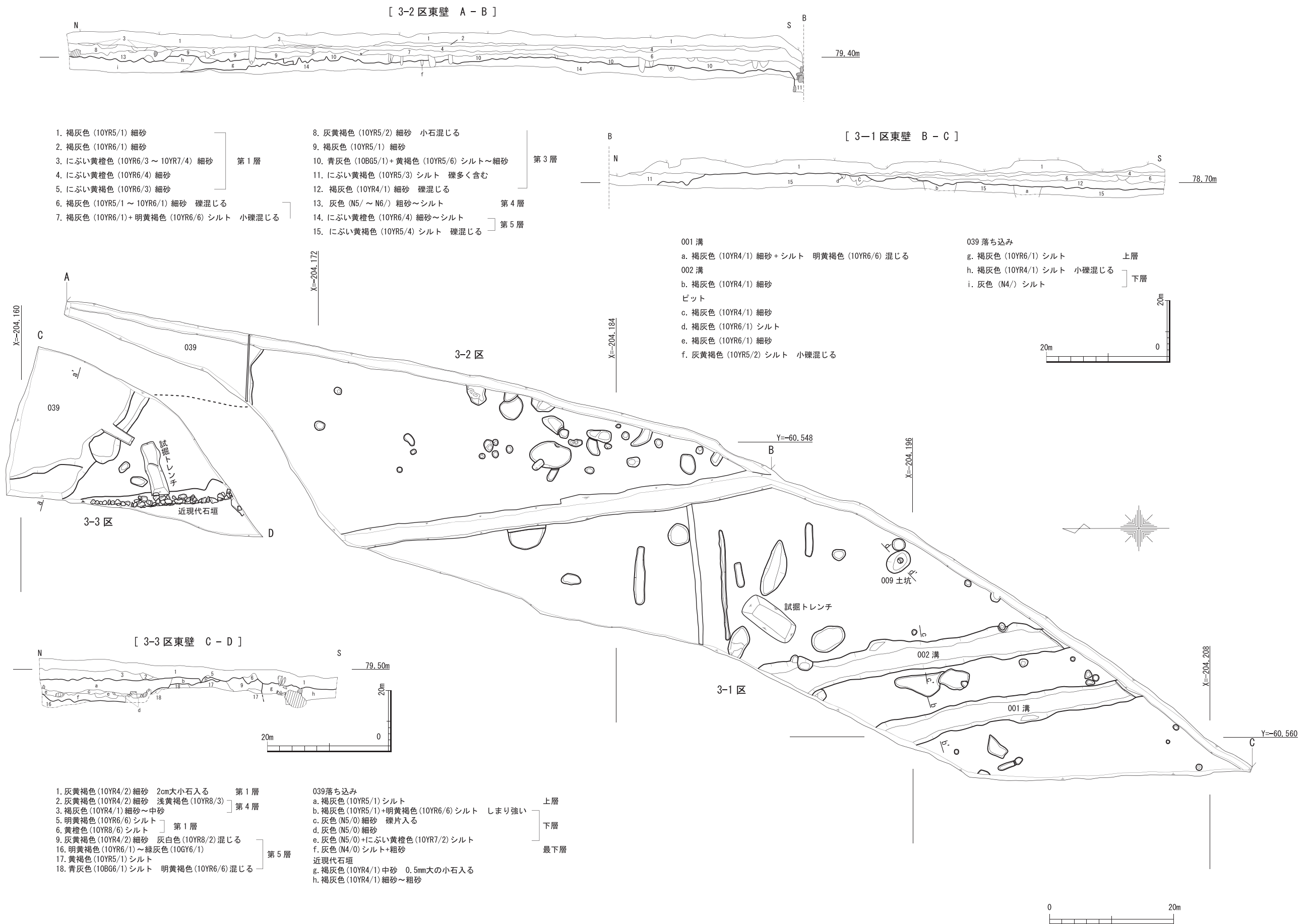


図 9 3 区遺構平面図 (S=1/150)・調査区土層断面図 (延長 S=1/150・高さ S=1/75)

5. 出土遺物

1 区では、出土遺物は少ない。土師器小皿（1）が包含層から出土しており、強いヨコナデで仕上げられ、底部外面にはスノコ状の板状圧痕が見られる。

2 区では、遺構からの遺物は見られなかった。包含層中から、（2）の東播系須恵器捏鉢の口縁部が出土している。口縁部の外反が弱く、口縁端部の上下の拡張は認められるものの垂下しない。また外面頸部には、重ね焼きの痕跡が認められる。鎌倉時代中頃（12 世紀末から 13 世紀初頭）と考えられる。（3）は内面に印判手による染付を施した小皿もしくは碗である。釉薬は極薄くかかり、高台は低く削りだしている。（4）は備前焼播鉢で、口径は 25.8cm と復元できる。スリメの単位は 10 本で 1 単位と推測され、16 世紀～17 世紀のものと考えられる。

3 区では、遺構からは 002 溝と 039 落ち込みから遺物が出土している。包含層からは、（6）・（7）・（8）の土師器羽釜の口縁部が出土している。口縁部は、くの字状に屈曲させ、やや外反するように延びる。回転ナデにより調整が施される。（9）・（10）は瓦器碗である。（9）は見込部にジグザグ状の暗文が施され、鎌倉時代後半（13 世紀前半）のもと考えられる。（10）は、体部は丸みをおび、高台は断面三角形を呈する高台が貼り付く。（11）は瓦器の皿で口径は 11.2cm と復元できる。口縁端部は回転ナデにより丸く仕上げられている。（12）の瓦器小皿で口径 7 cm と復元でき、口縁端部はやや強いナデにより外反し丸くおさまる。（13）はサヌカイト剥片で、（15）は黒色土器で内面を黒色に仕上げている。（18）は、中国製の青磁の皿である。口径 10cm ほどの小皿で、室町時代中頃（15 世紀前半）のものと考えられる。（19）は染付の丸碗で、釉薬は非常に薄く施される。（20）は須恵器長頸壺の口頸部で、3 - 3 区の試掘トレンチより出土した。口頸基部は細く外湾気味に上外方に延びる。外面中位に 2 本の沈線を巡らせる。内面・外面において回転ナデによる調整が施されている。奈良時代前半（8 世紀前半）と考えられる。

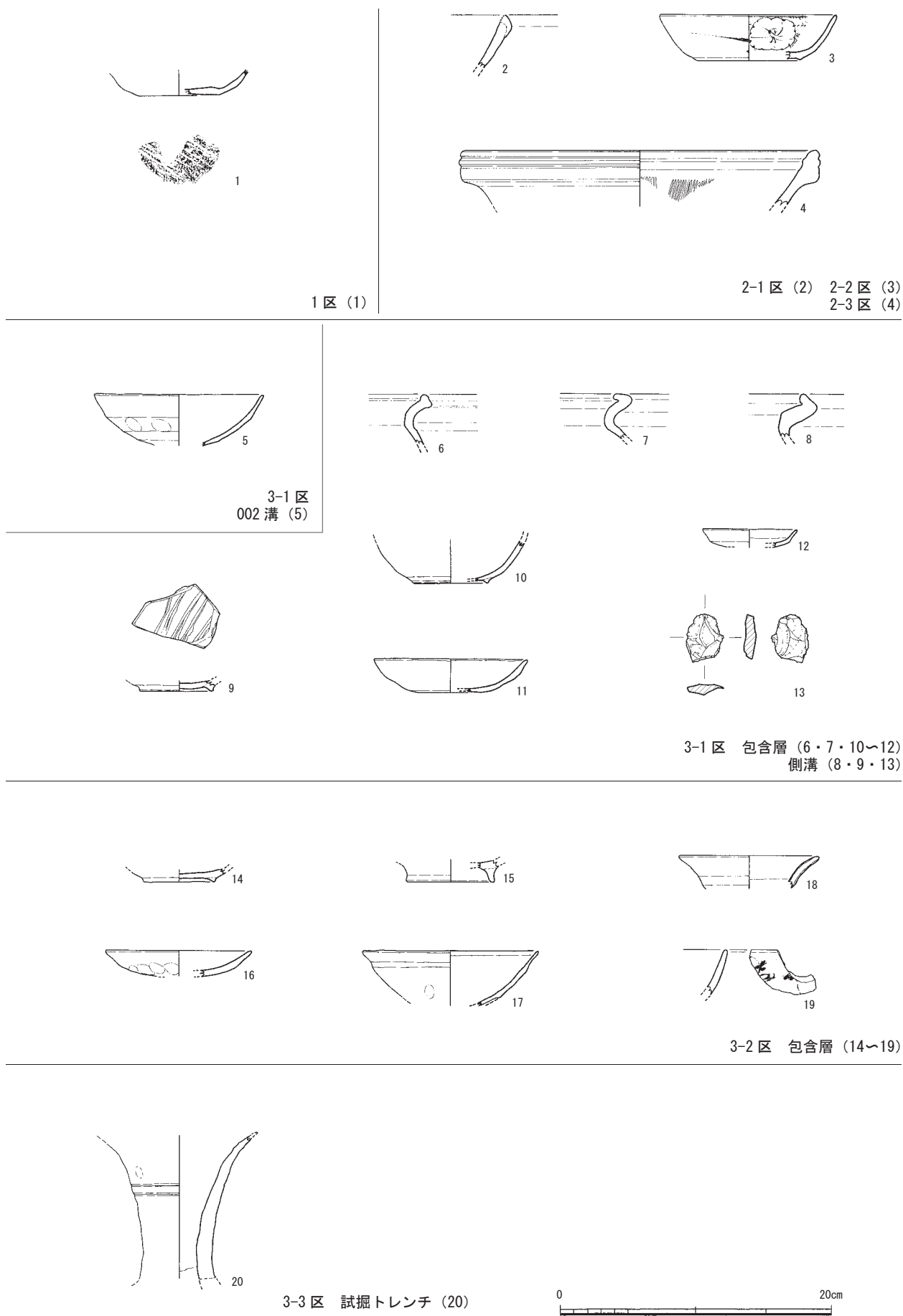
その他、図示は出来なかったが、瓦質土器や近世と思われる瓦、細片であるが弥生土器も見られる。

また、3 区の包含層中から出土した須恵器片は、外面はタタキ調整後に回転カキメ調整を行っている。内面は円弧状のタタキ調整が見られる。

002 溝からは、（5）の瓦器碗が出土している。内湾する口縁をもち口縁端部は丸く仕上げられている。体部外面にはユビオサエが確認できる。鎌倉時代前半（12 世紀後半から 13 世紀）のものと考えられる。

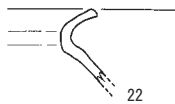
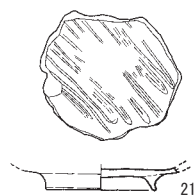
039 落ち込みの上層からは、（21）・（22）が出土している。（21）は瓦器碗の底部である。底部外面は横ナデが施され、八の字状に高台が付く。見込にはジグザグ状の暗文が施され、鎌倉時代中頃（12 世紀後半～13 世紀初頭）のものと考えられる。（22）は土師器甕の口縁部で、頸部はやや緩やかに屈曲し、わずかに上下に拡張する。外面・内面はナデにより調整されている。

下層からは（23）～（28）が出土しており、奈良時代前半（8 世紀前半）のものである。（23）・（24）は土師器甕である。（23）は、内面・外面共にナデを施し、口縁部端部付近に穿孔が上下方向に施さ

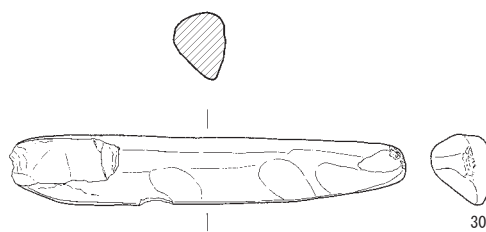
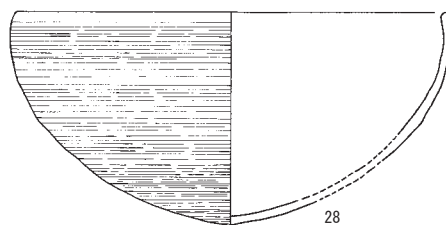
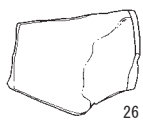
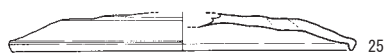
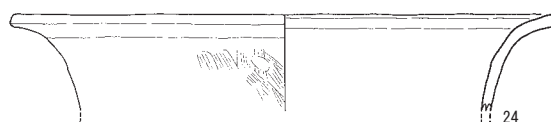
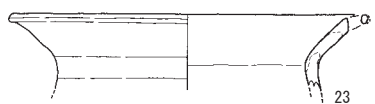


3-3区 試掘トレンチ (20)

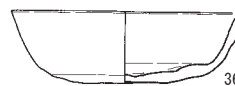
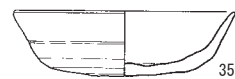
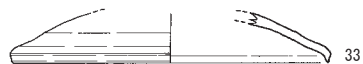
図10 1区・2区・3区出土遺物



039 落ち込み
上層 (21・22)



039 落ち込み
下層 (23~30)



039 落ち込み
最下層 (31~36)

図 11 3 区 039 落ち込み出土遺物

れている。穿孔は直径 0.7cm のもので、穿孔部分の端部は摩滅していることから、紐等を通して使用していたと考えられる。(24) は外面にハケメが施され、口縁端部から内面はヨコナデにより調整される。(25)・(26) は須恵器杯の蓋である。(26) は、内面に墨が付着し、転用硯とみられる。(28) は須恵器鉢である。口縁部は内湾し、底部は尖り底である。外面全面に細かく丁寧なヘラミガキが施され、金属器を模倣したものでいわゆる鉄鉢である。(29) は須恵器短頸壺である。口縁部は短く直立し端部は丸く仕上げられている。体部は最大径を上位に求める球体をなし、肩に張りが認められる。肩の張りよりやや下の位置に 2 方向に把手を貼付すると推測される。体部下位から底部にかけて回転ヘラケズリの調整が行われ、底部には高台を貼付している。また、頸部から肩部にかけて自然釉がかかり、自然釉は部分的に白く発泡した状態であることから、二次焼成を受けたと考えられる。本来は有蓋であったと考えられ、頸部に焼成時の蓋の癒着痕が認められる。

最下層からは (32)～(36) が出土しており、奈良時代前半（8 世紀前半）のものである。須恵器杯の蓋 (32)・(33)・(34) が出土している。(32) は、扁平な宝珠摘みが付く。天井部は平らで外面は回転ヘラケズリにより調整が行われている。(33) は天井部が比較的高く丸みを持ち扁平な擬似宝珠様摘みが付くと推測される。口縁端部にかえりは見られず、内側下方に曲げナデにより調整がされている。(34) は天井部が比較的高く、ヘラケズリにより調整が施される。(35)・(36) は須恵器杯で、口縁はやや外反し、端部は丸く仕上げられている。また底部は丸みを帯び、回転ヘラケズリの後ナデを施す。(35) においては、体部中央に浅い沈線が認められる。

V まとめ

今回の調査では、3 区において奈良時代（8 世紀前半）の遺物が出土した 039 落ち込みを検出した。この落ち込みは北側に位置する山間の谷によって形成された自然地形とみられ、昭和 55 年に実施されたグリット調査で周辺は沼地という成果から、検出した 039 落ち込みは北東山麓を南東にさらに広がると推測され、自然流路の一部と考えられる。

また鎌倉時代の遺構としては、3 区で検出した平行した 2 条の溝やピットがあり、現在の耕作地とほぼ同方向に溝が掘削されていることから、鎌倉時代以降に耕作地として利用され、現代の地割の基礎がこの段階に形成されたといえる。出土した遺物は鎌倉時代（12 世紀～13 世紀）のものが主体と考えられ、以前の調査よりやや時期が古い遺物が見られる。

今回の調査では以前の調査では確認されていなかった、奈良時代の遺物が出土したことは大きな成果といえ、周辺に奈良時代の遺構が展開することが推測される。

福田地区に関しては、「紀伊国神野真国莊絵図」（1143）が存在し、福田下遺跡の位置する箇所には「栗田村」が見え平安時代末の 12 世紀には集落の成立が見られる。また、それより以前には開発地主として「長衣友」の名が見られ、平安時代には集落が成立していたと考えられる。今回の調査で検出

された奈良時代と鎌倉時代の遺構・遺物はこのことを裏付けるものといえるのではないだろうか。

周辺の地形から概観すると、北側には真国川と南に貴志川が流れ東には標高 145 m 以上の山と、集落を形成するには本調査地周辺は好適地と言える。調査地北東の山麓に居住域があり、本調査地から河野城跡Ⅰの麓にかけてが生産域と集落の様相を復元できるが、遺跡範囲の西側については未調査の為、不明な点は多い。今後はこの西側を含めて遺跡の詳細の解明に期待される。

なお、福田下遺跡は、石器が採取されたことにより縄文時代の遺跡と見られていたものの、今回の調査では、昭和 55 年以降 3 ヶ年により調査された際と同様に、縄文時代の遺構や遺物は確認されなかった。

参考文献

- 小山靖憲 2001 「紀伊国」『講座日本荘園史 8 近畿地方の荘園Ⅲ』吉川弘文館
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』
- 美里町教育委員会 1983 『福田地区遺跡詳細分布調査報告書』
- 山陰加春夫 2002 「神野・真国荘」『きのくに荘園の世界下巻』清文堂出版
- 和歌山県教育委員会 2007 『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』
- 和歌山県編さん委員会 1983 『和歌山県史 考古資料』和歌山県
- 和歌山県立博物館 2011 『特別展 中世の村をあるく－紀美野町の歴史と文化－』

福田下遺跡 出土遺物観察表

() は復元値

報告書掲載番号	遺構名	地区	種類器種	口径	底部径	器高	残存率	胎土	色調	形態・技法の特徴など	備考
1	機械掘削	1区	土師器 小皿	—	(5.9)	残 1.8	20% (底部 50%)	普通。内面に 4mm の石含む 2mm 以下の石少量含む	外) 褐灰色 (10YR6/1) 内) にぶい黄褐色 (10YR7/2) 褐灰色 (10YR6/1) 断) にぶい黄褐色 (10YR7/3 ～ 6/3)	・内面・外面ナデによる調整 ・底部外面、板状圧痕が施される	反転復元 拓本有
2	機械掘削	2-1区	東播系 須恵器 挫鉢	—	—	残 4.0	5%	密	外) 灰色 (N5/) 灰白 (N7/) 内) 灰色 (N6/) 断) 灰色 (N6/)	・内面・外面ナデによる調整 ・口縁部の弱く外反し、外面頸部には重ね焼きの痕跡有	
3	精査	2-2区	染付皿	(13.0)	(7.7)	3.3	10% (口縁部 12%)	密	外) 明青灰色 (5B7/1) 内) 灰白色 (N8/ ～ 7/) 断) 灰白色 (N8/)	・肥前系？	反転復元
4	機械掘削	2-3区	備前焼 挫鉢	(25.8)	—	残 4.0	5% (口縁部 10%)	普通	外) 灰色 (N6/) 赤褐色 (10R4/4) 内) にぶい赤褐色 (10R6/3) 断) にぶい赤褐色 (10R6/3)	・外面回転ナデの後ナデによる調整 ・口縁部の上下の拡張部分に 2 条の凹線が見られる ・すり目 1 単位 10 本？	反転復元
5	002 溝	3-1区	瓦器碗	(12.4)	—	残 3.8	10% (口縁部 10%)	普通 2 ～ 3mm 石少量含む	外) 灰色 (N5/ ～ N4/) 内) 灰色 (N4/) 断) 灰白色 (2.5Y7/1)	・内湾する体部で、口縁端部は丸く仕上げられる ・外面はナデによる調整、部分的ユビオサエが見られる	反転復元
6	包含層	3-1区	土師器 羽釜 (口縁)	—	—	残 3.7	5%	普通	外) 灰色 (N6/) 赤褐色 (10R4/4) 内) にぶい黄褐色 (10YR7/4) ～ 明黄褐色 (10YR7/6) 断) 灰色 (N6/)	・くの字状に屈曲させ、やや外反するように伸び端部は上方に拡張する ・回転ナデによる調整	
7	包含層	3-1区	土師器 羽釜 (口縁)	—	—	残 3.3	5%	普通	外) 褐灰色 (10YR6/1) 灰黄褐色 (10YR6/2) 内) にぶい黄褐色 (10YR7/2) 断) 褐灰色 (10YR5/1)	・くの字状に短く屈曲させ、内湾気味に伸びる口縁部をもつ 口縁端部は内側に織り込むようにし、回転ナデによる調整	
8	包含層	3-1区	土師器 羽釜 (口縁)	—	—	残 3.8	5%	普通	外) 褐色 (2.5YR7/6 ～ 6/6) 内) にぶい黄褐色 (10YR7/4) 断) 灰色 (N5/ ～ 4/)	・くの字状に短く屈曲させ、外反するように伸び端部は上方に拡張する ・回転ナデによる調整	
9	側溝	3-1区	瓦器碗	—	5.4	残 0.8	20% (底部 50%)	緻密	外) 灰色 (N4/) 内) 灰色 (N4/) 断) 灰白色 (5Y7/1)	・底部外面は高台を貼り付け、端部はハの字に付く ・内面見込み部分にはジグザク状の暗文が見られる	
10	包含層	3-1区	瓦器碗	—	(5.4)	残 3.1	10% (底部 20%)	緻密	外) 灰黄色 (2.5Y6/2) 内) 灰黄色 (2.5Y7/2) 断) 灰黄色 (2.5Y7/2)	・貼り付け高台 ・高台断面は三角形を呈す ・体部は丸みを帯びる	反転復元
11	包含層	3-1区	瓦器皿	(11.2)	(4.8)	2.5	20% (口縁部 20%)	緻密 2mm 大石粒含む	外) 黄灰色 (2.5Y6/1) ～ 灰黄色 (2.5Y6/2) 内) 灰黄色 (2.5Y6/2) 断) 黄灰色 (2.5Y6/1)	・端部は回転ナデにより丸くおさめる	反転復元
12	包含層	3-1区	瓦器 小皿	(7.0)	(5.8)	残 1.3	10%	緻密	外) 灰色 (N4/) ～ 灰色 (10Y5/1) 内) 灰色 (N4/) 断) 灰色 (10Y5/1)	・口縁端部は、やや強い横ナデにより外反し丸くおさめる	反転復元
13	側溝	3-1区	サヌカイト	最大長 3.6	幅 2.8	厚み 0.9	—	—	灰色 (N6/ ～ 5/)	剥片	
14	包含層	3-2区	瓦器碗	—	(5.2)	残 0.9	10% (底部 25%)	緻密 1mm 大石粒微量含む	外) 灰色 (N4/) 内) 灰色 (N4/) 断) 灰黄色 (2.5Y7/2)	・貼り付け高台 ・高台は低くハの字状	反転復元
15	包含層	3-2区	黒色土器 碗？底部	—	(6.4)	残 1.6	5% (高台 10%)	普通	外) 浅黄色 (2.5Y7/4) 黄灰色 (2.5Y5/1) 内) 暗灰色 (N3/) 断) 黄灰色 (2.5Y6/1)	・黒色土器 A ・貼り付け高台	反転復元
16	精査	3-2区	瓦器小皿	(10.6)	—	残 1.9	25% (口縁部 12%)	緻密	外) 灰色 (N5/) 灰色 (N4/) 内) 灰白色 (N7/) 断) 灰白色 (N7/)	・内面・外面はナデにより調整・放射状にユビオサエが施される	反転復元
17	包含層	3-2区	瓦器碗	(12.9)	—	残 4.0	10%	緻密	外) 灰オリブ色 (5Y5/2) ～ 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 内) 灰黄色 (2.5Y6/2) 断) 灰黄色 (2.5Y6/2)	・体部下方粘土剥離 (粘土板結合法か)	反転復元
18	機械掘削	3-2区	青磁皿	(10.0)	—	残 2.4	10%	緻密	外) 灰オリブ色 (7.5Y5/2) 内) 灰オリブ色 (7.5Y5/2) 断) 灰白色 (5Y7/1)	・口縁部は外反し端部は丸くおさめる	反転復元
19	包含層	3-2区	磁器丸碗	—	—	残 3.3	5%	密	外) 灰白 (10Y7/1) 暗青灰色 (10BG4/1) 内) 灰白色 (10Y7/1) 断) 灰白色 (N8/)	・釉薬は薄くかかる	
20	試掘 トレンチ	3-3区	須恵器 長頸壺 (頸部)	頸部径 (最小) 5.1	—	残 10.7	30% (口頸部 80%)	緻密 2 ～ 3mm 大石粒少量含む	外) オリブ灰色 (10Y5/2) 内) 灰色 (N6/) 断) 灰色 (N5/)	・口頸基部は細く外湾気味に上外方にのびる ・内面・外面口ロナデによる調整 ・外面中に 2 条の沈線がめぐる	
21	039 落ち込み	3-3区	瓦器碗	—	5.7	残 1.2	10% (底部 80%)	普通	外) 灰黄色 (2.5Y7/2) 灰色 (N6/) 内) 灰色 (N6/ ～ 5/) 断) 灰黄色 (2.5Y7/2)	・底部外面はナデを施し、貼り付け高台の端部は丸く仕上げられ、ハの字に付く ・内面見込み部分にはジグザク状の暗文が見られる	部分復元
22	039 落ち込み	3-2区	土師器 甕 (口縁)	—	—	残 4.1	10%	緻密 1mm 大石粒微量含む	外) 橙色 (7.5YR6/8) 内) にぶい橙色 (7.5YR7/4) 断) 灰黄色 (2.5Y6/2)	・口縁部は回転ナデ、内面はナデによる調整 ・外面ユビオサエを施す	
23	039 落ち込み	3-3区	土師器 甕 (口縁)	(18.8)	—	残 5.0	10% (口縁部 10%)	緻密 1mm 大石粒、灰粒微量含む	外) にぶい黄褐色 (10YR7/3)、褐灰色 (10YR5/1) 内) にぶい黄褐色 (10YR7/3)、褐灰色 (10YR5/1) 断) 褐灰色 (10YR4/1) ～ にぶい黄褐色 (10YR7/3)	・内面・外面ナデによる調整 ・口縁部に上外側から直径約 0.7cm の穿孔を施す	反転復元
24	039 落ち込み	3-3区	土師器 壺 (口縁)	(28.5)	—	残 5.1	10% (口縁部 40%)	密 片石・石粒礫 2 ～ 3mm 大中量含む	外) にぶい黄褐色 (10YR6/4) 内) にぶい黄褐色 (10YR6/4) 断) 暗灰黄色 (2.5Y5/2)	・内面はナデ調整、部分的にユビオサエを施す ・外面刷毛目を施す	反転復元
25	039 落ち込み	3-3区	須恵器 杯蓋	(18.0)	—	残 2.0	25%	緻密 2 ～ 3mm 白石粒微量 5mm 大石粒少量含む	外) 青灰色 (10BG5/1) 内) 灰色 (N6/) 断) 灰色 (N4/)	・外面・内面はナデを施し、天井部はへう削りが見られる ・扁平なつまみが付くと推測される	反転復元
26	039 落ち込み	3-3区	須恵器 杯蓋	(16.0)	—	残 1.1	15%	緻密 1mm 大石粒少量含む	外) 青灰色 (5B6/1) 内) 青灰色 (5B6/1) 断) 灰白色 (N7/)	・内面・外面ナデによる調整・天井部は平らで低く、扁平なつまみが付くものと考えられる	反転復元
27	039 落ち込み	3-3区	須恵器 杯身	—	9.5	残 1.5	10% (底部 25%)	緻密 白石粒微量含む	外) 灰色 (N6/) 内) 灰色 (N6/) 断) 灰色 (N6/)	・貼り付け高台 ・高台はやや低く外端部で接地する	反転復元
28	039 落ち込み	3-3区	須恵器 鉄鉢	(22.8)	—	11.3	40%	緻密	外) 灰白色 (N7/) 内) 灰色 (N6/) 断) 灰白色 (N7/)	・口縁部は内彎し、端部はほぼ内傾する面をもつ ・底部は深く尖底 ・外面全面に細かく丁寧なへう磨きが施される	反転復元
29	039 落ち込み	3-3区	須恵器 短頸壺	13.2	(13.2)	14.2	40%	緻密 5mm 大石粒少量含む	外) 灰色 (N5/) 内) 灰色 (N7/) 断) 灰白色 (N6/1) ～ 灰色 (N5/)	・口縁には、焼成時の蓋端部の磨痕が見られる ・外面口縁から肩にかけて自然釉がかかり、2 方向に小型耳が付く ・体部下側部にはへう削りが見られ、底部には貼り付け高台を施す ・内面はナデによる調整	反転復元
30	039 落ち込み	3-3区	石製品	最大長 21.0	幅 3.7	厚み 3.2	90%	—	灰白色 (N8/ ～ 7/)		
31	039 落ち込み	3-3区	土師器 甕 (口縁)	(31.1)	—	残 2.6	10% (口縁部 10%)	やや密 片石・白色粒 中量含む	外) 褐灰色 (10YR6/1) 暗灰色 (N5/) 内) 浅黄色 (2.5Y7/3) 断) 浅黄色 (2.5Y7/3)	・外面・内面ナデによる調整、部分的にユビオサエによる調整	反転復元
32	039 落ち込み	3-3区	須恵器 杯蓋	—	—	残 1.9	10%	緻密 白石粒少量含む	外) 灰色 (N5/) 内) 灰色 (N5/) 断) 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 灰色 (N5/) サンド	・扁平なつまみが付き、つまみが中央が盛り上がり凸状をなす ・天井部は平らで外面は回転へう削りの調整	部分復元
33	039 落ち込み	3-3区	須恵器 杯蓋	16.6	—	残 2.6	40%	緻密 白石粒少量含む	外) 灰色 (N6/) 内) 灰色 (N6/) スズ？暗灰色 (N3/) 断) 灰色 (N5/)	・内面・外面ナデによる調整・天井部は高く、扁平なつまみが付くものと推測される	反転復元
34	039 落ち込み	3-3区	須恵器 杯蓋	(16.4)	—	残 2.5	20%	緻密 白石粒少量含む 3mm 大微量含む	外) 灰色 (N6/) 内) 灰色 (N4/) 断) 灰色 (N6/) 黄灰色 (2.5Y6/1) サンド	・天井部はやや高く丸みをもつ・端部は内側下方に曲げられ丸く仕上げる	反転復元
35	039 落ち込み	3-3区	須恵器 杯身	11.6	8.1	3.4	95%	密	外) 青灰色 (10BG5/1) 内) 灰色 (N6/) やや黄色帯びる 断) 灰色 (N4/)	・口縁部はやや外反し端部は丸く仕上げる・底部は丸みを帯び、回転へう削りのあとナデ ・体部中央に浅い沈線を施す	
36	039 落ち込み	3-3区	須恵器 杯身	(12.2)	5.0	3.8	70%	緻密 2・3mm 大石粒微量含む	外) 灰色 (N6/) ～ 褐灰色 (10YR4/1) 内) 灰色 (N5/)	・口縁部はやや外反し端部は丸く仕上げる ・内面ナデによる調整	口縁端部 復元

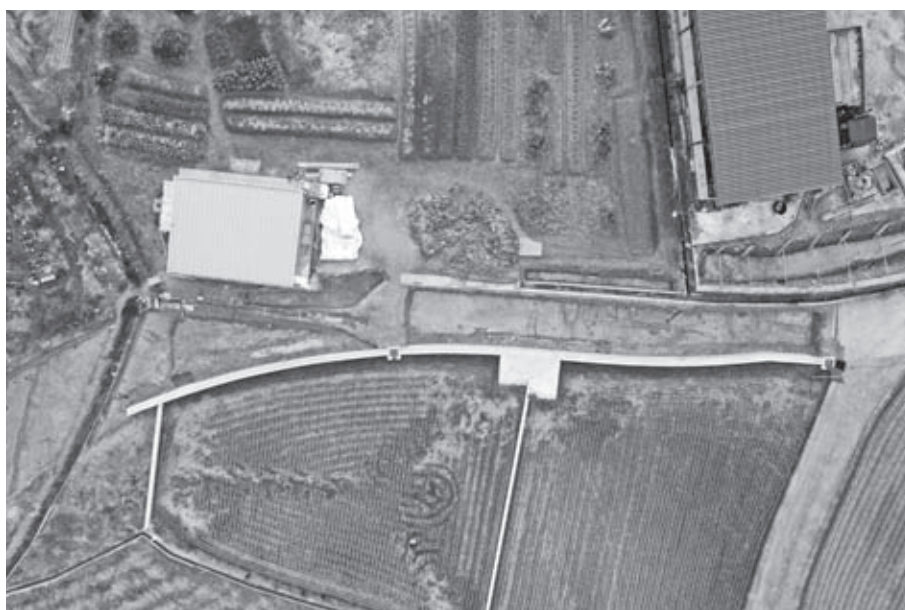
1. 調査地全景
(上空から)



2. 1区全景
(上空から)



3. 2区全景
(上空から)



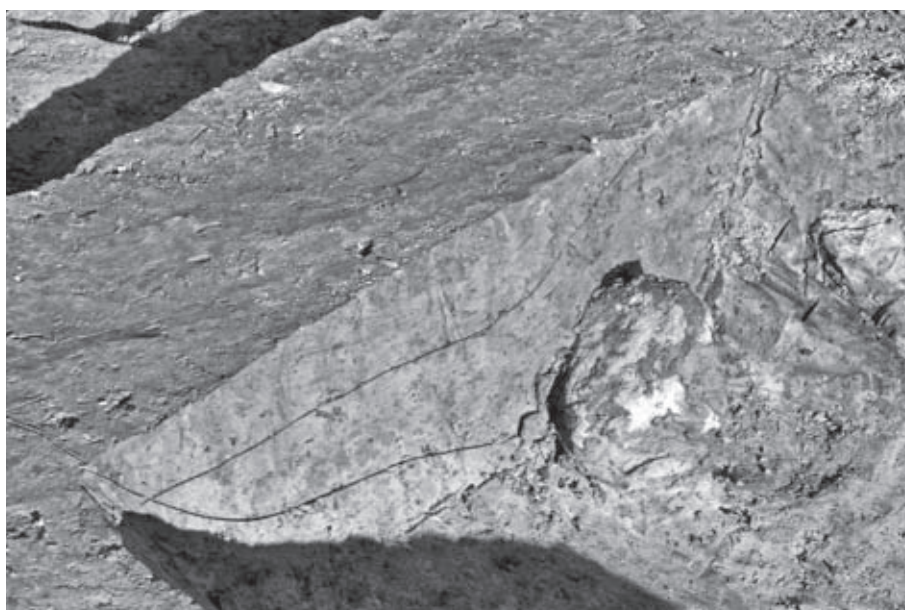
1. 2区 041 溝・042 溝
完掘状況（北から）



2. 2区 042 溝土層断面
（南から）



3. 2区 047 溝土層断面
（北西から）



1. 3区全景
(上空から)



2. 3区全景
(北から)



3. 3区全景南西側
(北から)



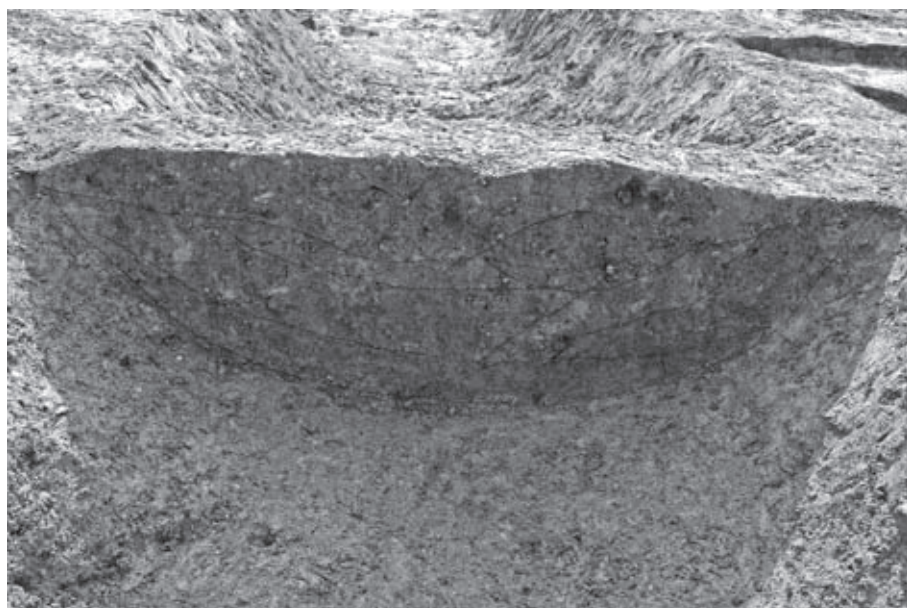
1. 3区001・002溝
完掘状況（北から）



2. 3区001溝土層断面
（北から）



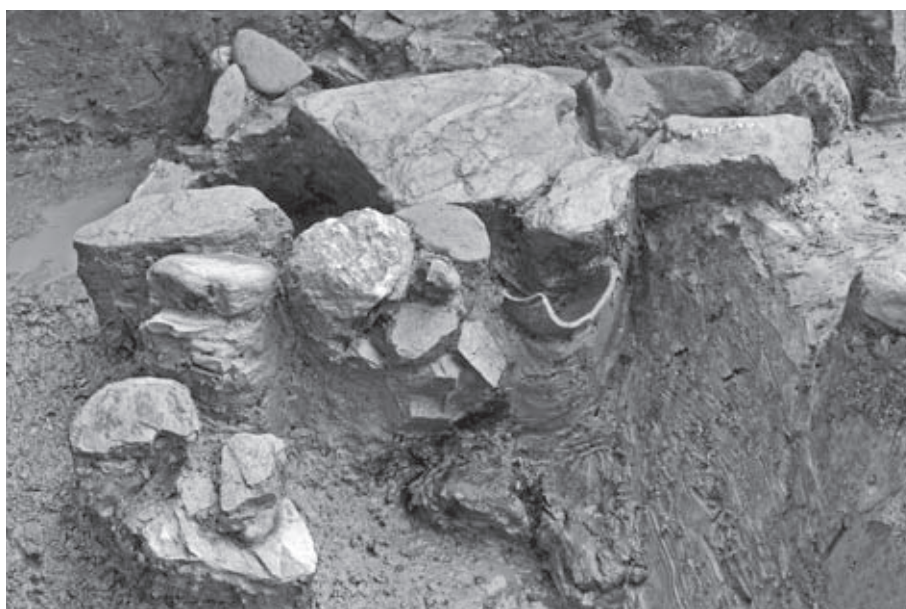
3. 3区002溝土層断面
（北から）



1. 3-3 区全景
(南から)

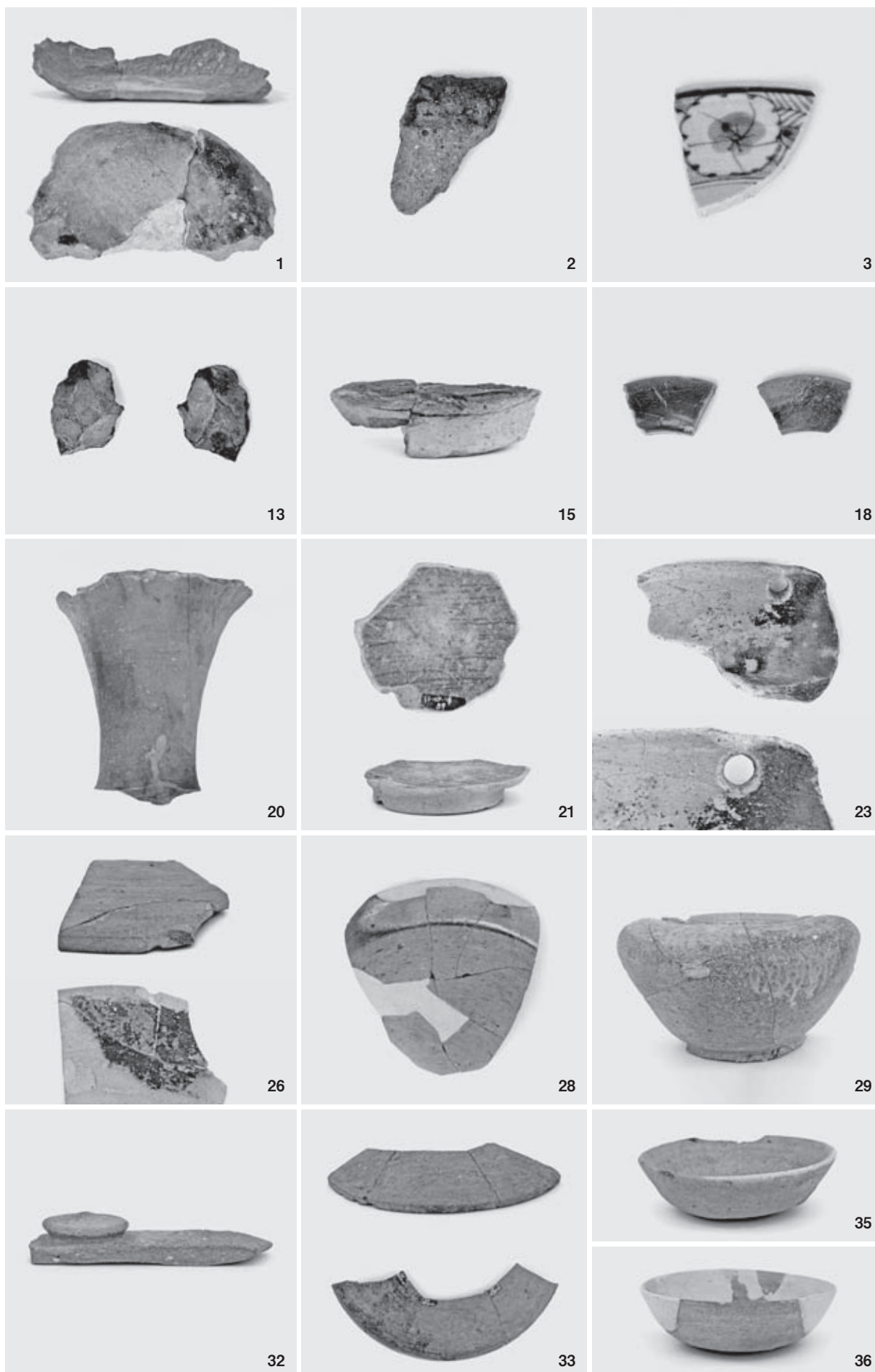


2. 3 区 039 落ち込み
遺物出土状況 (西から)



3. 3 区 039 落ち込み
遺物出土状況 (西から)





報告書抄録

ふりがな	ふくだしもいせき							
書名	福田下遺跡							
副書名	町道福田松瀬線道路改良工事に伴う発掘調査報告書							
編著者名	津村 かおり							
編集機関	公益財団法人和歌山県文化財センター							
所在地	〒 640-8404 和歌山県和歌山市湊 571 番 1 TEL 073-433-3843							
発行年月日	西暦 2012 年 3 月 26 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査 面積	調査原因
ふくだしもいせき 福田下遺跡	かいそうぐん 海草郡 きみのちょう 紀美野町 ふくだ 福田	30304	5	34° 9' 26"	135° 20' 35"	2010年10月25日 ～ 12月28日	555m ²	町道福田 松瀬線 道路改良 工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
福田下遺跡	集落	古代		落ち込み		須恵器	特になし	
		中世		溝		瓦器		
要約	福田下遺跡の発掘調査を行った。中世を主体とした遺構が確認され、溝跡がを2条検出し、現代の耕作地とほぼ同方向に掘削されていることから、中世以降耕作地として利用され、現在の地割りの基礎が中世段階に形成されたと考えられる。また、調査地北側で落ち込みを検出し、出土遺物から8世紀以降において周辺に集落が形成されていたことが推測される。							